須賀川の坂 ⑯

山寺坂

西川太郎松
付近に山寺坂が

古代(奈良時代)の会津街道は、国府のあった上人坦から西に通じていた。このころ、山寺には国府寺や国府尼寺が置かれていた。ここに、国府の重要な神社として祭られた日枝神社がある。国家鎮護のため、国府の近くに京の比叡山の地主神である山王神社を祭った神社である。

石背国の国府寺(国分寺)も薬師寺山(米山寺)の南面に実存したことが、昭和五十三年から昭和五十六年の四か年にわたる調査で判明した。また、米山寺遺跡の南側一帯に、米山寺跡とそれに伴う僧坊(寺院に付属した、僧侶の住む家)など十二軒の建物も明らかにされ、現在では、史跡米山寺公園として市民に親しまれている。

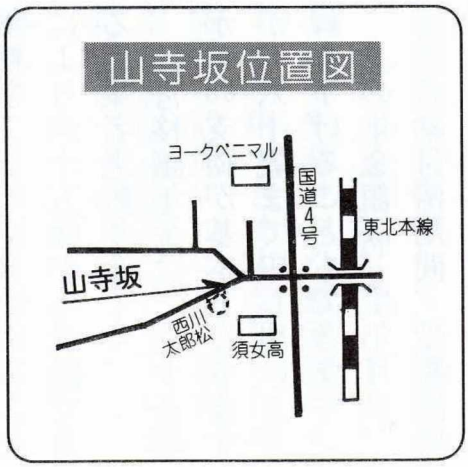
日枝神社の鳥居前の高台から、岩瀬富士と呼ばれている「宇津峰山」を正面に望むことができる。この南側に須賀川女子高校がある。この地域は、長者屋敷あるいは陣場山などと呼ばれ、岩瀬氏の本拠地のあった所と伝えられている。

鎌倉時代に入ると須賀川地方は、鎌倉幕府の支配となり、二階堂家が岩瀬郡七万石の領主として、須賀川台地に須賀川城を築いた。これまで岩瀬郡を支配していた岩瀬氏は、二階堂家に旧領を没収され、わずかに森宿(この地区は、二階堂家の城下町で古くから上宿、中宿、下宿から成っていた)一郷を与えられて二階堂家の家臣団に組み込まれたが、その居城は、陣場山城を中心に設計されている。

この城の水の手は、釈迦堂川で、船着き場を「長者が浦」と呼んでいる(須賀川城絵図から)。

これらの遺跡から考えると、古代の岩瀬郡は、現在の西川地区を中心として栄えたことが明らかである。

永山倉造



須賀川の坂 ⑰

夫婦坂

稲地内の夫婦坂

旧市内から大字稲に向かって平太仏を過ぎると岩渕街道と長沼街道が交差して稲村城跡の大手坂を登る。この坂を夫婦坂と地元では呼んでいる。

建保元年（一二一三）鎌倉幕府によって謀反の罪に問われた、和田平太胤長は、須賀川の二階堂行村に預けられ処刑された。ここには鎌倉時代の古碑があり、地元の人々は「平太仏」と呼んでいる。

この南、鏡石町分に「かげ沼」がある。奥の細道の本文に「かげ沼という所行くに今日は空曇りて物影うつらず」と松尾芭蕉は記している。

このかげ沼一帯には和田平太の奥方の悲恋物語りが残っている。

稲村城に向かった奥方は、すれ違った農婦に、夫のことを尋ねると、すでに処刑されたと知らされ、悲しさのあまり、死を決したという。奥方は結婚の引出物にと夫からもらった鏡を取り出し、女の最後の化粧を終わると、鏡を抱いてかげ沼に入水したという。

このことを哀れに思った村人は、以来この沼を「鏡沼」と名づけ、この悲しい物語りを後世に伝えたという。

永山倉造

夫婦坂位置図

須賀川の坂 ⑱

別れ松の坂

越久
地内から
別れ松の
坂方面を望む

越久地区と仁井田地区の境、越久の坂を登ると別れ松にたどり着く。ここが「別れ松の坂」と呼ばれている所である。

別れ松の名の起こりは、大東亜戦争(第二次世界大戦)の時、出征兵士を送るため、村中の人々が日の丸の旗と出陣の旗を手に手に持って、この松の所で肉親と別れたところから付けられたという。

多くの青年たちを戦場に送らざるを得なかった大東亜戦争。今ではこの松も、戦場へ消えた青年たち同様、長い歴史の重さに枯れ果ててしまいました。

永山倉造

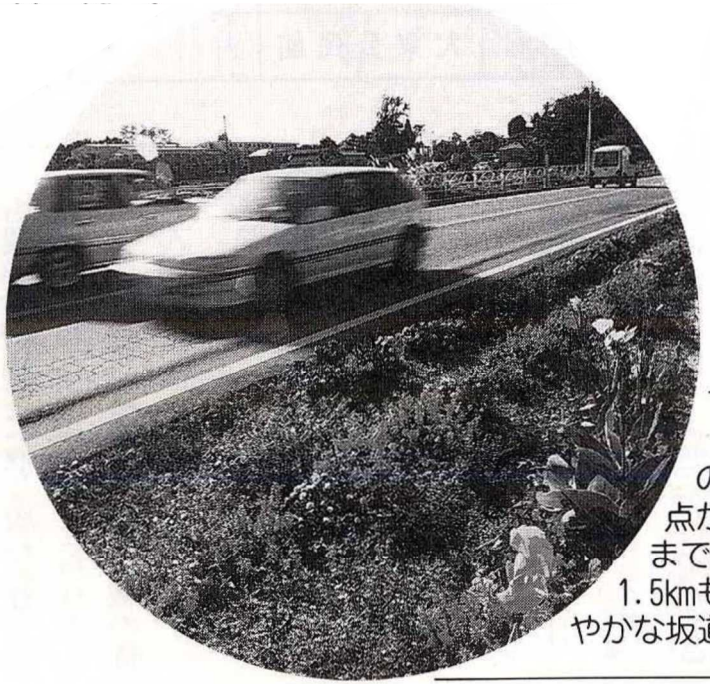
別れ松の坂位置図

須賀川の坂 ⑲

保土原の坂

鏡石町から西へ、岩渕地区を通り天栄村へ続いている街道がある。途中、保土原地区内は緩かな上り坂となっている。これが保土原の坂である。

この坂は、保土原城の坂とも言われている。



保土原の坂は始点から終点まで、およそ1.5kmも続く緩やかな坂道である

さらに、この街道を進むと下り坂になり、天栄村へ入る。坂を下りた所に飯豊神社がある。

この神社は、時の飯豊城の本丸に祭られ、城主は、二階堂家の一族である浅賀五郎左衛門である。

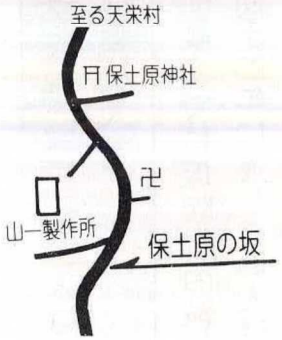
浅賀氏の出身地は、郡山地方の豪族であったため、生地の安積を姓としていたと伝えられている。さらに、二階堂家の家臣から飯豊城の城主となり、以来、この姓を名乗っていた。

須賀川城落城後は、地方豪族として一時、飯豊城に定住するが、その後に水戸家に任官し、その学識を高くかわれ、水戸光国（みつくに）に見いだされ、水戸家の家臣となった。以来、大日本史の編さんに当たった。

これが、水戸黄門漫遊記の格さん、その人である。

永山倉造

保土原の坂位置図



須賀川の坂 ⑳

雨田松ケ作の坂

空港アクセス道路に
変わってしまった
雨田松ケ作の坂

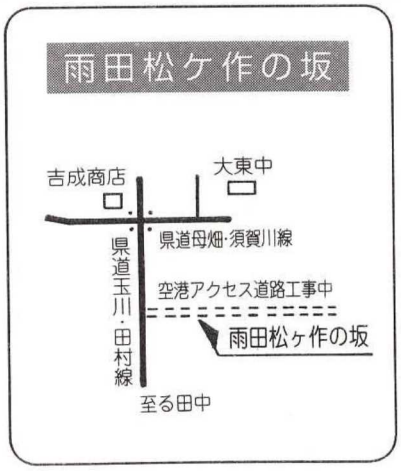
大東地区を南北に通ずる県道　玉川・田村線がある。日照田から雨田地区に通ずる里道（松原地区から東に通ずる古道）である。ここが雨田松ケ作の坂である。

ここに東北自動車道、須賀川インタチェンジから通ずる福島空港のアクセス道路が計画され、その工事に伴って埋蔵文化財発掘調査が行われた。東から松ケ作D、松ケ作C、松ケ作A、松ケ作B遺跡、松ヶ作地区遺跡（塚）、川屋向遺跡、松原A、松原B遺跡の八か所が調査された。

これらの遺跡に共通することは、八か所とも時期は奈良時代。特徴は、土器が大量に発見されたことである。この時代は、須賀川地方が歴史上最も繁栄した時である。

また、須賀川二中の南側に広がる、国史跡 上人壇（しょうにんだん）廃寺（石背（いわせ）国府）が営まれた時代でもある。この関係の遺跡として、米山寺、鎌足神社、宇都志国玉（うつしくにたま）神社、米山寺跡など、千二百年の古代の繁栄をしのぶことができる。

永山倉造



須賀川の坂 ㉑

長井の坂

雨田地内の長井の坂

大東地区で、一番なじみのある坂がこの長井の坂であろう。

小作田地内の東側から、雨田地内に通ずるこの坂は、途中、母畑街道の中でも高い所を通る坂道である。その長さおよそ一・五キロメートル。坂自体はゆるやかであるが、歩くとけっこう体にこたえるのである。

この坂の峠に立つと、南に小高い塚があったことがしのばれ、地元では、この塚を「トマリ山」と呼び、知名研究家によると、屋敷神を祭った所に残る地名とされていた。

この塚からは、弥生時代の祭りにかかわる土器が発見されている。

この坂の北は、北にゆるやかに下る斜面で「しどみ久保」と呼ばれている。しどみとは、蔀と書くのである。覆い隠されるとの意味がある。地元では蔀久保と呼び、雨田の舘主の城跡であると伝えられている。しどみには刺（とげ）が生えているところから、城の土塁に植えられていたと考えられる。

永山倉造

須賀川の坂 ㉒

高野の坂

今でこそ舗装になりすばらしい道路になったが、当時は山間部の細い道であった。

母畑街道を東に進み、雨田、大栗両地区を過ぎると狸森地区に入る。

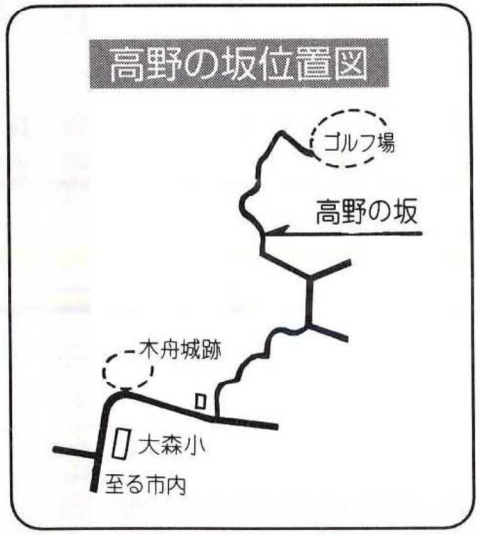
大森小学校の前方に、二階堂家の重臣、矢部下野守の居城「木舟城」跡が見える。この城跡の本丸の前を通り左折し、しばらく進むと、坂の中央部で四辻温泉からの登り道と合流し、高野の坂となる。この坂を登った所に陣ヶ平があった。現在は、ゴルフ場となっている。

陣ヶ平は、南北朝時代の山城で、本丸は約五十メートル四方の平場となっていた。また、そこには四方に高さ一メートルほどの土塁が築かれていた。

この城の中に大きな弓張り石があり、宇津峯城に備えていた。この館の北には小高い丘があり、頂は平場で、ここには常時、見張り役のたてあな住居があった。中世の鐘突堂遺跡である。この時代の戦争の作戦上の重要な作戦基地で、配下の城に、ここから狼煙（のろし）と鐘を使って信号を伝えた所である。

須賀川地方の中世の戦いに使われていた礫溜（つぶてだまり）は、陣ヶ平城と宇津峯城の出城である西舘の搦（からめ）手（て）から発見されている。

永山倉造



須賀川の坂 ㉓

国府が原の坂

古峯神社の参道（右）と国府が原の坂

須賀川橋をわたり、須賀川駅に向かってしばらく行くと、左側に市立第二保育所に登る坂道がある。

この高台を地元の栄町では、国府が原と呼んでいる。

この地名から、須賀川の歴史を振り返って見ると、今から千二百年前、ＪＲ須賀川駅の近くに古代（養老二年）石背の国が置かれたことが、和名類聚抄などに記されている。

現在、国史跡になっている上人壇廃寺跡は、国司が常駐した役所である。国司には、高月左大辨が任命され、軍団も指揮した。

この大地が、この時期に石背城として整備された。

ところで、さきに述べた国司高月氏は、なにわの国（大阪）の豪族である。国司としての期間は約十年で、ふたたび陸奥国に合併された。

永山倉造

平成三年五月一日号から二十三回にわたってお届けしてきました「須賀川の坂」も、今月号をもって終了させていただきます。来月四月一日号からは、新しいシリーズ「発掘された須賀川の歴史」をお届けします。ご期待ください。